

# 多員のひろば

## 今度こそは

美唄歯科医師会会員 雨田 実



現在美唄では、会史の編纂に歯会をあげて頑張っている。昨年12月18日、第1回の会史編纂実行委員会を開催以来、会合を持つたびに、それが遅々としたものであっても、少しずつは進行を見て、本年6月30日、かすかにであるが、光明が見えはじめた。日本史で言えば、高天原時代とも言うべき大正初期、高橋常保先生が初めて歯科医院を開業されてから、終戦後2年位までの北海道歯科医師会、空知支部歯科医会、美唄方面会時代（前史）約30年、終戦後、新制美唄歯科医師会認可以来50年史、三井、三菱、労災病院歯科史、美唄三師会史、新年会、旅行会、市内学校生徒口腔健診、乳幼児検診、乳歯の抜歯奉仕、女性歯科医師史、月形町、浦臼町と美唄方面会、その他に物故者、OBの先達の先生がたで、美唄にゆかりの深い方々の回想などを、各会員に担当を割りなど、大略の決定を見たので、7月中旬からは、毎週1回、編纂実行委員長の宝崎会長宅に、小森編集委員長、大坪編集委員幹事、他5名の委員が集合、今度こそは、前2回の轍を踏むことのないように、一刻も早く軌道に乗せるべく協議を重ねた甲斐があって、8月20日、依頼予定の印刷業者の担当者を交えて、具体的な話し合いの段階にまで進行した。

ヒマラヤに登るより難しいと言われる、会史の前途に、一連の曙光を皆が、見出すことが出来たことは、大変に喜ばしい。美唄における会史編纂の歴史は古く、戦前の昭和10年頃、美唄

方面会史を振り出しに、昭和37年頃、新制歯科医師会、15年史をの2回におよぶ。しかも2回目の折は、ご丁寧に記念品として花瓶を製作して各会員に配布までしたのに、結果的に会史の発刊は2度共に出来なかった苦い経験が、美唄歯会にはある。かくいう小生は、第2回目の会史編纂委員会の末席をけがした1人であり、責任から言えば前科があるのに、今回も編集委員会の中に相談役として、メンバーに入れてもらっている。本来なら、今回ははずされて然るべきであるのにと考えると、大変に申し訳がないと思っている。

その罪ほろぼしと言ってはどうかと思うけれど、昭和37年以降殆ど毎月投稿していた道歯会通信関係の資料はすべて、お役に立てれば、とお渡ししている。少しでも役に立てばの気持ちによるもので、その取捨得失に関しては、すべて委員会におまかせしている。たいして役にも立たない、ロートルが姑根性を、ということのないように常に留意している。といってもそれは、こちらの言分で、結構とうるさい、ロートルと思われているかもしれない。

道内で最小、あるいは日本で一番小さいであろう美唄歯科医師会が、一寸の虫にも五分の魂、山椒は小粒でもぴりりと辛いを、遺憾なく発揮して、今度こそは新しき酒は、新しき器に、新会長のもと、他に恥じることのない立派な、<sup>ちやう</sup>盛會80年記念会史の発刊の実現を、衷心から祈念して止まない。